

東奥日報

2023年(令和5年)3月12日(日曜日) (17)

昨夏の県内豪雨 日最大降水量

本県初の線状降水帯が確認され、津軽地方に大きな被害をもたらした2022年8月の豪雨災害について、災害調査チームを率いる八戸工業大の佐々木幹夫名誉教授(自然災害科学、水工学)が11日、中間報告を発表した。鱒ヶ沢町中心部で氾濫した中村川は流域平均

の日最大降水量が268.5㎜で約600年に1度、岳(弘前市)は同252.5㎜で約1600年に1度の記録的な豪雨だったと説明。「線状降水帯は今後、馬淵川や高瀬川の流域に発生してもおかしくない」とし、各地での対策の必要性を指摘した。(岡田圭逸)

中村川(鱒ヶ沢)600年に1度

岳地区(弘前)1600年に1度



佐々木幹夫
八工大名誉教授

昨年8月豪雨について、降雨、豪雨被害、河川水位、線状降水帯の各分野を分担し調査研究している。豪雨の確率は、中村川について

チームは佐々木氏のほか、八工大の竹内貴弘教授と高瀬慎介教授、東北学院大の三戸部佑太准教授の4人。

同日、八工大地域産業総合研究所が主催し八戸市の番町サテライトキャンパスで開いた防災フォーラムの席上で講演した。今回の調査研究成果を市民向けに公表したのは初めて。

佐々木・八工大名誉教授ら調査

「他流域対策を」

は1958〜2020年の63年間、岳は1976〜2021年の46年間の降水量データを使い、統計学的に計算した。

佐々木氏は「大雨が降る仕組み自体は以前から変わっていないが、地球温暖化で豪雨が頻発。考え方を百八十度変えて答えを見いだ

していかねばいけない」とし「堤防だけで防ぎきれない豪雨もある。行政任せにせず、一緒に対策を考えることが必要。どう被害を低減できるか家庭の中でも話し合っ」と呼びかけた。

※「この画像は該当ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」